第六回ふくふく童話大賞「大賞」

楽しい時間はあっという間

それは遠足の前の晩のことだった。トモ子はさっさと日記や宿題をすませると、九時きっかりには電気を消して、ベッドに入った。いつもよりずっと早い時間だった。

「こんなに早く寝るなんて、まるで優等生にでもなっちゃったみたい」

と、トモ子は自分でもおかしかった。でも、早くねむれば、すぐに明日がやってくる。トモ子は遠足が待ち遠しくてしようがなかったのだ。

トモ子は暗がりにぼんやりと浮かぶ天井を見つめながら、すごく幸せな気分だった。

「遠足が楽しみなんて、私もまだまだ子どもよね」

と、トモ子はくすりと笑った。

ところが、しばらくして、トモ子はちょっと困ったことに気づいた。

目がさえて、ねむれないのだ。

「私としたことがなさけない。これじゃまるっきり、遠足が楽しみで前の日にねむれない子どもみたいじゃないの」

トモ子はつぶやいた（それはその通りだった）。

トモ子は目をこらして、まくら元の目覚まし時計を見た。電気を消してからまだ十分もたっていなかった。トモ子はそっとカーテンのすき間から夜空を見上げた。街の明かりにかき消されて、星はあまり見えなかったけれど、明日の天気は問題なさそうだった。

トモ子はまた目覚まし時計に目をやった。さっき見てからまだ三分もたっていなかった。トモ子はカーテンを閉めて、ベッドに寝ころがり、もういちど時計を見た。やっぱりさっきと同じ時間だった。

「ああ、もう！　いったい何のいやがらせかしら。まるで時

間がゴムみたいに長くのびて、ぜんぜん進まない」
トモ子はまゆをしかめて時計をにらんだ。
　そのとき、目覚まし時計がため息をついた。トモ子はびっくりした。時計のため息なんて、生まれて初めて見たからだ。時計のため息は、ちょうど文字盤の６の数字のところからふわっと出てきて、しばらくわたぼこりのようにトモ子の目の前をただよって、やがて煙のように消えた。
「ねえ、時計に話しかけるなんて、すごくばかげたことだとは思うんだけど、あなた今、ため息つかなかった？」
トモ子はおそるおそる時計にたずねた。

「ついたともさ。時間は見えないくせに、どうやらぼくのため息は見えたらしいね。まったく、ため息の一つも出ようというものさ。なにしろ、ふつう、人は他人にみられるほど、どんどん洗練されて美しくなっていくものなのに、ぼくときたら、見られるほどにささくれた気分になっていくんだからね。ああ、なんて悲しいぼくの一生！」

時計がまるでへたな朗読でもするみたいに、芝居がかった声で言った。トモ子は、時計がいったい何をなげいているのかわけがわからず、まゆをひそめた。すると、時計はよけいに悲しそうな声で叫んだ。

「そうら、またその顔だ。君はいつもそうやって無神経にぼくをにらみつけ、ぼくの心を傷つけるのだ。時間の何たるかも知らないくせに」

「ちょっと、ちょっと。ちょっと待ってよ。私があなたを傷つけたですって？お母さんがあなたを買ってくれたのは、たしか私が小学校に入ってすぐだったから、あなたとはランドセルといっしょの長いおつきあいよ。電池が切れたら、いつもすぐに交換してやってるし、ごらんのとおり、私の部屋には、ほかに時計なんて一つもないでしょ。前に、誕生日にお父さんが壁かけの時計を買ってあげるって言ってくれたんだ

けど、時計なら一個でじゅうぶんだからって、断ったくらいなのよ（そのかわりに、コンピュータ・ゲームを買ってもらったので、お父さんとしてはかえって高くついた）。この部屋にいるときは、あなただけがたより。それなのに、私があなたを傷つけてるっていうの！」

「いや、あの、それは感謝しているともさ」

トモ子のけんまくに、時計はちょっとびびったみたいだった。

「でも、考えてみるがいい。君がぼくを見るときって、いったいどんなときだい？　いつだって、何かほかのことを気にしているときだろう。遠足のこととか、好きなテレビ番組の

時間とか、塾に行く時間のこととか。しかも、何度も見るときほど、いらいらしたりそわそわしたりしているときだ。君は今しがた、九時０分五秒、九時七分二十三秒、九時九分四十秒、九時九分五十三秒にぼくを見たけれど、そんなふうに落ち着かない顔で何度ものぞきこまれているとき、ぼくがどんな気持ちか、一度でも考えたことがあるかい？」

「ないわよ。あるわけないじゃない、そんなの。だって、それが時計の役目なんだもの」

「やれやれ」

と、時計がまたため息をついた。数字の６のところから、わたぼこりのようなものが出てふわふわふわふわとトモ子のおへそのあたりたりをただよい、煙のように消えた。
「ぼくには大きな夢がある。ぼくはイギリスのビッグベンのようになりたいんだ」
「ビッグベン？」トモ子は言った。
「これさ」
と、時計はどこにかくし持っていたのか、立派な時計台の写真を出してみせた。
「ロンドンのシンボルだ。人々は、尊敬の念をもって、この

時計を見あげるのさ」
「ご立派ね」
トモ子はとりあえずそう言ってみた。目覚まし時計のあこがれるものなんて、なんだかよくわからなかったけれど。
「また、われわれ時計の世界には、こういう格言もあるんだ。『時間を気にする者ではなく、時計を気にする者に仕えよ』。つまり、せかせかせずに、時計を大事にする主人がいちばんてことさ」
「あら、人間の世界では、『時計を気にする』っていうのは、『時間を気にする』っていうことと同じ意味なんだけど」

「そこに悲劇がある」
と、時計は叫んだ。
「人間は、時計と時間を同じものだとかんちがいしているのだ」
トモ子はだんだん　が　くなってきた。
「ねえ、時間をはかるのが時計でしょ。だったら、時計イコール時間だと考えても問題ないんじゃないの」
「それじゃ、ぼくの立　はどうなるのさ。時間は目に見えないけれど、われわれ時計は目で見ることもできれば、　でさわることもできるんだぞ。

われわれはいつも　　な時間を　えてやっているだけなのに、人間はそれに　して、やれ　いの長いのと、　　なことを言う。時間を　の　でのばしたりち　めたり、好き　　にいじくり回しているのは自分たちなのにね。君だって、きっと、明日の遠足が　わったあとで、『楽しくて、あっという間に時間がす　てしまいました』なんて日記に　くつもりだろう。でも、そんなの、われわれ時計のせいじゃないぞ！」

トモ子はなんだかつかれてきた。こんどはトモ子のほうがため息をついた。

「ねえ、私は　つに楽しい時間があっという間にす　たから

って、そのことであなたをせめるつもりはないのよ。それに、あなたの言いたいことも　しは分かった。　するに、時計として、もっと大事に、もっと尊　してほしいってことよね。自分なりに大事にしてきたつもりだけど、あなたには、ビッグベンみたいになりたいなんて立派な　上心もあるようだし、それについては私ももうちょっと考えてみることにする。でもね、時計さん、それならあなたにも一つ　して、できれば　してほしいところがあるの」

「なんだい、それは？」

「それは、ひと　に十五分もおくれるところよ。あなたに

気がないのは分かってるけど」
「　　きちんと十五分おくれるというのは、それはそれで、なかなかむずかしいことではあるのだが・・・」
時計はもごもごと言った。
「でも　　よ」
トモ子がはっきりと言ったので、時計はだまりこんでしまった。どうやら傷つけてしまったようだった。
「ごめんなさい。　し言いす　たわ」
「・・・」
「ねえ、ほんとうに十五分くらいどうってことないわ。さっ

き言ったことは　り消すから、どうか気にしないで」
「・・・」
「ねえ、時計さん・・・」
「　リリリリリリリリリ！」
　けたたましい目覚ましの　で、トモ子はびっくりしてがばっと　び　きた。それは、ふだんにも　して大きな　で、じゅうがびりびりとふるえるほどだった。
　だった。どうやら、いつのまにかねむってしまったようだった。
「ひどいわね」

と、トモ子は時計をにらんだ。時計は、にらまれてどう思っているのか知らないけれど、ぶつぶつ文　を言ったりしない、いつもの目覚まし時計にもどっていた。

「今日は遠足だ」

そう思うと、トモ子の　元に自　に笑みが浮かんできた。

遠足は、　待どおりとても楽しくて、あっという間に時間がす　ていった。

さて、その晩のこと。トモ子はさん　ん　った　に、遠足のことではなく、時計と話をした夢のことを日記に　くことにした。夢とはいっても、とても　思　な　だったし、そ

れにけっこう楽しかったからだ。
　トモ子は日記のおしまいに、
「楽しくて、あっという間に時間がす　、いつの間にか　になっていました」
と、つい　いてしまった。
「こんな　き　をすると、時計さん、また　っちゃうかな」
と、トモ子はくすりと笑った。
　そのときだ。わたぼこりのようなものが、トモ子の目の前にふわふわとただよってきた！
「何度も言うけど、それはぼくのせいじゃないぞ！」

と、目覚まし時計が叫んだ。